

## 第14期 葛飾区社会教育委員の会議（第14回）会議録

●開催日時 令和6年10月8日（火） 午後2時～4時

●会 場 区役所 706会議室

●出席者

社会教育委員 （5人）

高井 正 萩原 建次郎 緒方 美穂子 澤村 英仁 伊藤 香織

事務局職員 （4人）

生涯学習課長	柏原 正彦
生涯学習課学び支援係長	佐藤 吉裕
生涯学習課学び支援係主査（社会教育主事）	与儀 睦美
生涯学習課学び支援係	矢作 孝寛

出席者 計9人

### 次第

#### 1 議事

- (1) 提言の内容の検討
- (2) 今後の会議の進行について
- (3) その他

### 配付資料

- 第13回会議会議録案
- 提言の構成(案) [資料1]
- 提言素案(第1章:副議長作成) [資料2]
- 提言素案(第2章:議長作成) [資料3]
- 萩原建次郎「子ども時代を`置き去り`に」(Wedge2024No.10) [資料4]
- 第14期葛飾区社会教育委員の会議スケジュール(案) [資料5]
- まなびぶらす vol.36
- 関連事業チラシ(かつしか区民大学「第9期区民運営委員会 委員募集」・「子育てに役立つ生と性のおはなし講座」・「下町さんぽ」・「親と子のふれあい教室」・「忍者修行」・「第26回 柴又どんたく」・「第23回 水元わくわくまつり」・「生涯学習課公式 note」・第69回葛飾区民文化祭)

—開会—

○事務局 今日足下の悪い中、おいでいただきましてありがとうございます。ただいまから第14回、社会教育委員の会議を始めます。

本日、欠席のご連絡を頂いている委員は佐藤委員と山村委員です。齋藤委員は遅れていらっしゃいます。伊藤委員は、お仕事の関係で途中退席されます。また、本日は萩原副議長がリモートで参加されます。副議長、お声をいただけますか。

○副議長 はい、聞こえています。ひどいぎっくり腰をしてしまい、全てをオンラインでやっております。すみません。

○事務局 よろしくお祈いします。

それでは、机の上に配付させていただいています会議録は第13回の会議録案でございます。こちら、ご確認の上、修正箇所がございましたら10月22日火曜日までに、事務局のほうに修正のご連絡をお願いできればと思います。データでもお送りしたいと思いますが、まだ公開はされていないものですので、外部に出されないよう、お願いします。

それから、第12回の会議録は既にホームページ上で掲載しております。どうぞ御覧ください。

本日は、傍聴の方はいらっしゃいません。

今日の資料のご説明をさせていただきます。次第が一番上にあるかと思ひます。それから、資料1は高井議長から、提言の構成の案をいただひています。

○議長 前回出したのと同じものですが、今日は1章、2章の部分だけです。

○事務局 「以下、略」になっていますので、今日は分かりやすいように、こちらを提示して下さっています。

そして、資料2は萩原副議長からの、第1章の部分の案です。プロットの部分で、後から説明をしていただく予定です。

それから、資料3は高井議長から第2章のところの素案ということひです。

資料4は、萩原副議長から資料提示をしていただいたもので、後ほど副議長のほうからご説明があるかと思ひます。

資料5は、スケジュールの表ひです。

その後は関連事業のチラシひです。かつしか区民大学の第9期の区民運営委員募集の案内。それから、区民大学の中の事業の案内として、性教育や下町さんぽ、親子のふれあい教室ひです。それから、区民大学ではない事業ひですが、忍者修行と、柴又どんたくと水元わくわくまつりといった館まつりのご案内ひです。区民の人たちが企画、運営している館まつりひです。それから、生涯学習課の公式noteの宣伝と、区民文化祭ひです。こちらは、皆さん方に補助金について審議していただいた文化協会が取り組んでいるものひです。資料は以上ひです。皆さん、全てござひますでしょうか。

それでは、この後の進行は高井議長にお祈いします。

○議長 では、これから中身に入っていきたいと思います。その前にお尋ねといひますか、このチラシ、「子どもの命と体と心の守り方」というので、生涯学習課が問合せ先になっていて、企画運営がNPO法人になっていますので、これは、「わがまち楽習会」ですか？

○事務局 これは「わがまち楽習会」ではなくて、「かつしか区民大学」の1つです。区民大学には、区民運営委員会が企画する講座と、区の職員が直接企画する講座と、団体連携講座という団体の皆さんと連携をしている講座があり、これは団体連携講座の1つです。そのほかにも、教育機関との連携講座もあります。

○議長 これは団体の人が一緒にやりたい、こういうことをやりたいと手を挙げるのですか。

○事務局 それに近いのですが、公募制ではなくて、団体の皆さんから声を頂いたものの中から区として大事かなというものを吸い上げて、一緒にやっているという形です。

○議長 「わがまち楽習会」のほうは手を挙げる、公募制ですね。

○事務局 そうです。

○議長 分かりました。

○事務局 NPO法人さんばほうす葛飾というところが、区民大学として運営しています。

○議長 区民大学の形は、多様なのですよね。分かりました。

## 1 議事

### (1) 提言の内容の検討

○議長 では、これから議事に入っていきたいと思います。今日の主な中身は、1章と2章の中身について検討していくこととなります。会議の回数としては非常に少ないわけですので、1回1回、とても大事になるかなと思っています。1章については萩原先生に書いていただくということで、今日はプロットを出していただいております。2章以降は私が担当ということで、一応文章化したものを出させていただいております。初見で議論をするのは非常に難しいかと思いますが、できる限り何とかやっていければと思っています。

最初は、萩原先生にお書きいただいた1章のプロットのご説明と併せて、今日は資料として『Wedge』に掲載された先生の原稿もあります。この中身も、提言の中身とも重なってくるころがありますので、冒頭、この『Wedge』のほうをご説明いただいてから、プロットについてご説明いただいてから、皆さんと意見交換をやっていければいいかなと思っています。

では、第1章のほう、この循環のイメージのところを萩原副議長からご説明お願いいたします。

○副議長 それでは、まず資料の4として、お手元にございます『Wedge10月号』、これは先月の20日に発売されたばかりのものでして、その中身が、実はこの第1章の部分を補完する中身

でして、また今回の学びによる循環型社会が今なぜ必要であるかということをも補完する議論にもなるかと思ひまして、補足資料として提出させていただきました。

この『We d g e』の特集自体が「孤独・孤立社会の果て」ということで、「誰もが当事者になる時代」だということ、目次の部分もコピーをお送りしたのですが、目次を見ていただくと、高齢者とか中年とか、それだけではなくて、あらゆる世代でそういった孤独や孤立というのが広がっているというのを、社会学や福祉学や教育学、あるいはジャーナリストとかノンフィクション作家など、あらゆる角度で論稿を集めたものになっています。これは結構反響がありまして、ネット上でもいろいろなところに転載されたこともあって、いろいろなところに取り上げてもらっているものなのですが、その中で私自身も「子ども時代を“置き去り”に 若者が孤独感を強める理由」というところを担当して、インタビュー記事も載せてもらっています。

国の統計ですと、若い人たちの世代が実は最も孤独感を感じているというデータが出たということもあります。今も昔も若者、青年期というのは、1回は孤独を感じるものだという議論はあろうかと思うのですが、昔の孤独感と今の孤独感はバックボーンが違うということを一応断っておく必要があるかと思っています。今の若者を取り巻く孤独感というのは、セーフティーネットがない、社会的孤立のリスクを背景とした孤独なのです。それが、実は子ども時代から始まってしまっている、ということについて書いています。

子ども時代から、どう始まってしまっているかということ、この提言の第1章につながってくる地域コミュニティの中で、社会の中で子どもが育つという、そういう環境がどんどん衰弱してしまっている。とりわけ放課後の子どもたちの自由空間がどんどん失われて、どんどん遊び環境が縮小して、そこに関わって見守ってくれていた地域の大人たちの見えないネットワーク、見守りのネットワークというのも衰弱してしまっていて、今、子どもたちは本当にインターネットの世界、自室にこもりながら友達とネットでつながりながら遊ぶというような状況に陥っている、というようなことが書かれています。

ですので、これは前回、高井議長からご推薦いただいた雑誌『社会教育』の記事とも重なるのですが、中間団体が力を失ってしまっていて、孤立、孤独の問題が浮上した、それは高度経済成長のあたりから始まっている、という記事が載っていたかと思いますが、それと重なる話になっています。

そうした、実は子ども時代を置き去りにしたまま青年期を迎えて、本当に他者とコミュニケーションを取るところでさえも今、厳しい状況は大学でも起こっております。どんなにアイスブレイキングを半年かけてやっても、それでも気の合うというか、何となく空気感が似た者同士が集まって、それ以上グループワークに参加しないという、なかなか大変な状況が今、大学でも起こっています。こうしたバックにある地域環境の問題、地域コミュニティの人間関係あるいは子どもたちの生育環境の問題というのが、色濃く今の孤独や孤立化ということと結びついているということを紹介した記事になっています。

その流れで、私のほうでご用意させていただいた第1章のプロット案のほうを御覧ください。第1章の部分は、“学びによる循環型社会”とは何だろうか、という私たちが考えているイメージを言葉にしてみたというところになります。

いきなり、私たちが考える「学びによる循環型社会とは」というふうに始まる前に、今、お話をしたような、区の生涯学習を取り巻く社会状況はどういう状況にあるのかということを押さえておく必要があるのではないかと思って「(1) 区の生涯学習をとりまく社会状況」というのを設定しました。そこでは少子高齢化と都市化、グローバル化と人口流動による住民層のライフスタイルの多様化、区民同士の共助的な関係の希薄化、社会的孤立リスクの高まり。今、先ほどご説明した記事内容と、ここは重なります。そして、子どもの生育環境の変容というところが、これは葛飾区だけではない話ですけれども、起こっていると。

一応、エビデンスというものも示しておく必要があると思ひまして、次に、葛飾区が区として出している人口統計のデータに基づきながら、データを少し抜粋しつつ、整理したものを持ってきてあります。

まず、少子高齢化についてですけれども、高齢化率は徐々に上がってきている。ただ、全国平均よりも葛飾区は低い状況で、20年間で10%増になっているということです。後ほどお話をしますけれども、若者人口は増えているので、葛飾区全体としては人口も増えていますし、若者の世代の層も増えているということで、緩やかに高齢化が進んでいる区ではないかなと見えます。なので、少子高齢化といっても葛飾区の場合は、まだまだ多世代がそれぞれバランスよく交流できるような人口構成になっているのではないかなということを感じました。

転出入の割合の推移を見ますと、日本人の転入者数は大幅に減少しているのです。ですが、外国人人口は大幅に増えているということが分かりました。つまり、ここに「住民層の多様化」ということが見えてくる。とりわけ外国人人口の増加分が、総人口の増加分や増加率と連動しているのです。

もう少し外国人住民にフォーカスすると、2020年までの20年間で1.7%から4%に増えていました。そして、現在は47万人の区民の人口に対して2.9万人という割合です。全体として、20年間で外国人住民の割合が増加傾向だということです。

それに伴って、外国ルーツの子どもや保護者が増加しているということも、これで、はっきりデータで分かったのですけれども、0歳から14歳の、要は乳幼児から学齢期の子どもたちの人口の推移を見てみますと、日本人は減少傾向なのです。日本人の子どもたちは減少傾向なのですが、外国人の、外国をルーツとする乳幼児や児童生徒数は大幅に増加しているということがデータで分かりました。ですから、教育現場、小学校、中学校においても、外国をルーツとする子どもたちは増えているということになりますし、そうなる就非常に多文化化が実際に教育現場でも起こっているということが推測できるわけです。

そして若者人口は、20代だけを取り出すと、実は日本人、外国人ともに増加傾向だということが分かりました。ここが1つ、区全体の人口増を下支えしていることが見えてきたところです。

これらを、こうしたエビデンスに基づいて考察してみると、先ほど申し上げたような少子高齢化と都市化は進んでいると同時にグローバル化も進んでいるということ。そして、住民層が多様化しているということ。そして、20代の外国人の若者、恐らく推測ですけれども、これは単身者が多いのではないかなということも見ていて感じます。そうした、まだ世帯を形成していない、家族を形成していない20代の若者層が多いということは、あまり地域とつながらない人たちも増えているのではないかなということも推測できるのです。それは『We d g e』に書いたような20代の若者も、実は社会的孤立リスクというのが生じやすい状況にもなっている可能性はあるということです。

一方、生涯学習や社会教育関連の課題を見ていくと、地域でどういうことが起こっているかというと、青少年育成者、子ども会や青少年地区委員、青少年委員などの高齢化が進んでいて、担い手不足が生じている。そして、地域組織、自治町会、子ども会、PTAについては、緒方委員にも確認しなければいけないのですけれども、加入率が低下している。これは全国の傾向で言っている部分もあるのですけれども。あと子ども会とジュニアリーダーの活動が縮小してしまっている。そして、日常的な地域参加機会が縮小したり、結果、次世代育成機能が低下してしまっていること。若者、とりわけ20代の学びとつながりの機会が、それによって必要性として見えてくるということ。そして、外国をルーツとする子どもや保護者が増えてきているということもあって、多文化理解と多文化交流・共生という課題が見えてきているということ、まず前提として(1)に書いていました。

そして(2)では、循環型社会を私たちはどういうイメージで捉えるのかということについて、一言でサブタイトルをつけると「多様な区民の学びを通した生きがいとつながりの創出」と、ワンフレーズで書いてみました。

さらに、この循環型の「循環」を、学びによる縦の循環と横の循環との2つに分けています。

(1)が「学びによる縦の循環の創出」です。これは、子ども、若者世代、そして大人の世代という多世代間の縦の循環を主に指しているわけですが、それをある程度ワンフレーズで柱を立ててみました。①として、子ども・若者の地域参加と世代継承のライフサイクル。②として、地域への愛着、地域を共につくる若者層の育成。これはジュニアリーダーとして、これまで取り組まれてきたところではあるのですけれども、あまり「リーダー」と言ってしまうと、非常に一部の若者だけがフォーカスされがちで、今必要なのは、あらゆる若者に対しての社会的孤立リスクを防止しつつ、地域に愛着を持って、それぞれが地域の主体者になってくれるような若者層をいかに育ていくかということが大事だということで、「リーダー」というような文言は、私のほうではあえて消しています。そして③として、学びを通した子ども・若者同士の他世代との共生関係づくり。

一応事例として、この会議の中でも紹介されていた青少年育成地区委員会、佐藤委員が取り組まれている、「かつしか郷土かるた」の事例をここに入れて、具体的に葛飾ではどのような取組がされているのかということ、ここで少し述べたらどうかと思っています。ここでは地域の大人も関わっていますし、中学校のアナウンス部の生徒の協力なども得ながら、ここに1つの縦のつながりというものが意識されていますので、そこを取り上げたいと。

こうしたことに基づいて、「展開可能性」は、今後どのような可能性があるのか、またこうした縦の循環がどんな意義があるのかということをつくか柱を立ててみたらどうかと思いました。

まず、異年齢や多様な大人と子どもの顔の見える交流が生み出すつながり。そして、大人と関わることの楽しさや、大人になることの憧れがその中から育まれること。そして、きょうだい関係が少ない中での「社会的な兄姉」の存在の重要性。また、子ども・若者の社会性発達ですね。やはり地域参加が、参加体験が多い子どもほど社交性だとか社会性が高いというのは、いろいろなデータで言われていることです。あと、レジリエンスです。挫折したときには上がる力、そういった、何かあったときでも回復していく力というのは、相談できる相手が地域に増えるということであるとか、そうした「社会的オジ」とか「社会的オバ」、あるいは「地域親」と言ったりしますが、多様な大人との関係の中で、相談する相手も複数化して、そこから何かあったときに友達だけではなくて、いろいろな人から支えられながら生きていくという意味でのレジリエンスの獲得というのを立てています。

そして、子ども・若者の社会参加による社会的承認体験、自己肯定感、ウェルビーイングの向上など、地域参加、社会参加によって多様な大人や多様な他者と関わること、そして、それが何かの地域にも還元されている。自分がやっていることが多世代にも還元されていくのだということの実体験というのが非常に自己肯定感を高めてくれるし、自己有用感も高めてくれるということなどが、縦の循環の中で起こり得るだろうと書きました。

次に、今度は横の循環ですけれども、この横の循環創出として、個人の学びと、協働と共同の学びの好循環ですね。「キョウドウ」に2つの意味、漢字を当てましたので、「個人の学びと」で1回、意味としては切れません。個人の学びとキョウドウの学びの好循環という、そういうサブタイトルをつけています。

ここでは、学習者の個人の中での学びの深まりと、それがさらに継続していく。学んで、またさらに進んでいって、またより学んでいこうという個人の縦の継続的な循環。もう1つは、学習機会への「参加」から、学習をつくる「参画」への循環。これは受講者から学習支援者へという、杉並区の大人塾にあるような、そういう循環。3つ目として、学びを基盤とした活動者同士がつながり、学びと活動の輪が広がっていく循環。これによって地域活動、地域で自主的な活動が広がっていくという循環です。そして4番目、学びの成果を活かした地域づくりの担い手の拡大。これによって副次的に地域づくりをしていく人も生まれてくる、そうした循環、拡大、横の循環が生まれる

という、4つに整理してあります。

事例としては、「かつしか区民大学」、区民運営委員会や、「わがまち楽習会」をここで紹介したらどうかと思います。

これらによる展開可能性と意義については、1つは個々人の生きがい創出やウェルビーイングの向上。2つ目、学びを通じた区民同士のつながり創出。3つ目、地域の多様な自主活動の創出。4つ目、多様な活動・区民同士がつながることによる社会的孤立の防止。5つ目、区民と行政の協働による地域課題の解決。これは「わがまち楽習会」を意識したところです。6つ目が、世代や年齢を超えた学び合いによる多世代交流・多世代理解・多世代共生関係の創出。7番目が、ルーツの違いを超えた学びあいによる多文化交流・多文化理解・多文化共生関係の創出。8番目が、区民主体の学習機会の創出。これは杉並の大人塾であったり、荒川のコミカレであったり、新たな区民による、今度は学習をつくっていくと。そういうようなことも考えられるだろうというふうに、一応プロットとして、こういうような中身を入れてみたらどうかというような案です。

ですので、皆様からどんどんたたいていただいて、これは要らないのではないかとか、ここは重複しているのではないかとか、そういうことがありましたら、忌憚なくおっしゃっていただければと思います。私からは、以上になります。

○議長 萩原副議長、ありがとうございました。詳細にわたって、イメージしているものをお言葉にさせていただいたのかなと思います。今まで議論してきたことを当てはめていただいたり、整理し直していただいて、私たちもこういったことを考えていた、ということも改めて感じることができたと思っています。

それでは今、読んでみて質問とか、このところはどういうことなのだろうかというようなことも含めて、自由な意見交換をしたいと思います。その上で加筆するところ、ここはちょっと省いたほうがいいのではないかとというようなことがあれば、ご意見を頂ければと思います。まず、ご説明いただいたところで、何かご質問やご意見を頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

改めて、では1の「エビデンス」というところで、葛飾区のデータをこういった形で分析していただいて、高齢化が進んできているといっても、本区の場合は少し緩やかであるというようなことが分かったり、若い世代は減少しているイメージがあるのですが、20歳から29歳については少しずつ増えてきているというようなこともあったりとか、はっとするようなところもご指摘いただいたのかなと思います。

私は豊島区の生涯学習推進協議会の委員をやっております、今、新しいビジョンをつくっているところですが、豊島区においても若い人は増えているのです。それはなぜかということ、外国人の留学生がものすごく増えているということなのだと思います。ということは、単身者ばかりということになってきます。単に若い人が増えているだけではなく、どういう層の人が増えているかによって、また課題が違ってくるのだなと感じたところなので、萩原先生のこのご指摘、本当にそのとお

りだなとお聞きしました。

また、教育現場と多文化化のことなども触れていただいたりしながら、これはきっと区内の学校にもそういった現状が、実際に場面がもうたくさん出てきているかと思います。ご意見などを頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

○**緒方委員** PTAの加入率は間違いなく低くなっています。昔はもう100%、強制的に加入させられていたところから、PTAは任意加入団体であるということが普及してきて、加入しますか、しませんかという意味確認をするようになって、で加入率が低くなっています。

同時に活動量も非常に低くなっていて、自由に任意で加入したからといって、活発に活動したいと考えて加入している人たちばかりではないというところが課題で、活動量が非常に減っているということは、地域とのつながりも希薄になってきているという問題があります。

もう1つは、教育現場の多文化化が進んでいるというところですが、以前から、PTAが共生を目指す活発な活動があるような地域で、多文化共生を目指すような活動があれば、外国人の保護者も包摂されて、いい子育て環境ができるし、それが教育に対してもいい影響を与えられたと思うのですが、現状はそういう可能性がますます低くなってきてしまっているのかなと思います。

あともう1つ、副議長がご指摘になっている若者の孤独感というところですが、最近、私も子ども食堂とかフードパントリーの活動を通して特に感じることがあります。子ども食堂や子どもの居場所をつくろうという活動を、区内でネットワークをつくってやっています。子育て世帯対象に活動をしてきていて、若者が食料に困って我々のところに来て、あなたは対象外ですから区の福祉窓口に行ってくださいと案内してきたのですが、これはよくないなというのを最近感じています。

若者が困窮しているという、その背景には孤独、孤立があるのですよね。散々社会の中で傷ついて、葛飾区にたどり着いて、葛飾区の子ども食堂とかフードパントリーのネットワークに助けてくださいと来た人に対して、我々は何にも持っていないというか。せいぜい今、若者相談という区の窓口がありまして、そこがとてもいいサポートを若者に、生活面でも精神面でも、心のケアも含めて、適切なサポートをしてくれているので、若者相談に行ってくださいというのが私の最終結論です。その辺と「学びの循環」とがどう関係するかは私の中で整理できないのですが、若者の孤立という視点もすごく今、大事なところになってきているなどは思いました。

○**議長** ありがとうございます。ちなみにPTAの加入率というのは、数字では何かあるのですか。何割とか。

○**事務局** 多分、地域教育課がPTAの加入に関する実態調査をしているはずなのです。PTAの加入率についても、それぞれのPTAが出してくるものを多分集約しているのだと思うのです。低いところは7割を切っているとか。

○伊藤委員 半分弱なところが1、2校ありました。校長会でも調査をしています。

○事務局 あとは、PTAを名乗らない。「〇〇の会」という会にした、とか、PTAを名乗っていても、役割分担制にしている、1人1役という役割の下にPTA活動が成り立っているとか。本部とか専門部みたいなものが成り立たないという状況が生まれています。

○事務局 または、全て本部に集約してしまっ、それ以外のところは声をかけた人が集まってくる、その役割を担うというように、本部機能だけを残しているというところもあります。

○議長 ありがとうございます。

○澤村委員 この間テレビで見たのですが、PTAの活動を委託しているところがあるようです。

○議長 そうですね。運動会とか、行事を整理したり、それを業者に委託してしまうとか。

○澤村委員 それを、私は聞いて、びっくりしましたけれども。

○事務局 本部の運営者自体を委託しているところもあるのです。葛飾ではないですが。

○事務局 葛飾は、まだ外部委託をしているところは多分ないと思います。

○議長 運動会の機材を出したり、自転車の整理も、PTAとか保護者がやっていたところを、外部委託で旅行会社とかが請け負ったりとかしていますね。

あと、若者相談というのものもあるわけなのですね。

○事務局 若者相談は多分、子育て政策課が外注をして、会社が入っていますね。外部委託をして、若者相談という業務を担ってもらっているようです。

○議長 コロナのときには若い女性の自殺率が増えたわけなのですね。それも貧困を理由にということ。なので、若者の貧困というのは緒方委員も言ったように、本当に人ごとではないような状況になっているのだなと感じました。今、緒方委員が、ご自身の活動の中から出会ってきた場面などをご報告いただいたわけなのですが、ここで、萩原副議長から何かコメントがありますか。

○副議長 若者相談についてですけれども、生活が困窮しているからといって、かわいそうな若者ということではないのですよね。今は非正規雇用のほうが多過ぎて、能力があつたり意欲があつても、会社側の事情で切られてしまう。コロナでは、そういうことが起こってしまったわけです。能力のある非正規雇用の若い女性が切られてしまって、収入源を絶たれてしまって、本当はできるのに、という人たちも一定数いたわけなのですよ。

なので、本当は若者層、20代、30代も積極的にターゲットとして、こういう区民大学のような敷居の低い参加の機会が多様にあると、そこで実は救われるということは、恐らく相当あったのではないかと。今もそうだと思います。

また、世田谷区は0歳から39歳までを対象にした3つのユースセンターを運営していますけれども、元気そうにしている若者も、ちょっと困っているなと思っている若者も、等しく、根底に生きづらさを持たざる得ない時代状況の中で生きているという認識の下で、分けないで受け入れてい

るのです。そこで大事なものは、その課題に向き合う、ではなくて、その来た若者と関係をつくるということを大事にしている、あるいは楽しい時間をつくる、仲間をつくる、そういった余暇を大事にしているのです。そこからいろいろなネットワークが彼らの中にも育まれていて、彼ら自身だって、実は解決する力を持っていたりするので、そういったところをエンパワーメントしていくような窓口がもっとあったらいいなというところなのですよね。なぜか大人と若者が分断されてしまっているという、私たちの思考の中でも大人と若者と子どもというのが分断されてしまっているというところを、バリアフリーにできないかなと、私は思っています。

○議長 今、都立高校では退学してしまう人が多くなってきているので、できるだけしないようにということで、ユースソーシャルワーカーを東京都の地域教育支援部が採用して、かなり派遣しているのです。カフェをやったりして、そこでソーシャルワーカーが関わっています。これは都の主任社会教育主事が先導して取り組んできた仕事で、退学者が減ってきたり、その中で関係をつくるということ自体が行われてきたり、そういうようなことを都立高校ではやったりもしています。というようなことも含めて、関係をつくること、関わることの楽しさ、みたいなどころがあると、自己肯定感にもつながっていくのかなと思って、その活動を私も見てきました。今のお話がすごくつながってきているかなと思いました。

伊藤先生のほうで、授業の現場の多文化化とかも含めて、感じていらっしゃるのでしょうか。

○伊藤委員 PTAは、働いている方が多いので、オンラインでの活用が増えてきているなというところはあります。あと、数年前と思考が大分変わってきて、やれることをやれる人が、という思考で運営がされている学校も多い、というところはすごくあります。それはある意味、時代に合ったやり方としてプラスに捉えていて、やってみてよかったという有用感とかを味わいながら、続けてくださっている方が多い、というのは本当に感じているところです。

若者の孤独感で、これが良い事例に当たるかは分からないのですが、うちの学校の卒業生が、それこそドロップアウトをしてしまった子が、管楽器クラブに教えに来てくれて、交流ができるような場面が最近ありました。いつでもうちに来て、そういうことをしてくれていいよ、という外部指導員的なもので取り入れているところがあって、その子たちの居場所にもなっている。そういう機会が増えればいいかなと、今感じているところです。

○議長 戻ることができる場所があるということなのですね。

○伊藤委員 というのは、ここ最近感じたことで。やはり教員は数年で異動してしまう中で、もちろん若者がそこに携わってくれれば学校もすごくありがたい。地域の方たちは、継続してずっとその指導に当たってくれる。うちなどは管楽器クラブとで指導者がいなくて困っている中、そういう卒業生がちょっとでも来てくれるとすごく助かっているという、お互いウィンウィンなところがあります。

○議長 知っている先生がいたら戻りやすいとかあるかも分かりませんが、ずっといるというわけにはいかないのです。

○伊藤委員 そうなのですね。

○議長 まず、区の生涯学習を取り巻く社会状況ということで数字を挙げていただきながら、私たち、価値観の状況というのをちゃんとデータを基に展開をしていただき、それを基に縦の循環と横の循環、それをつくっていくことの意味、そういう必要性の背景みたいなところを、副議長に言葉にさせていただきました。

○緒方委員 先ほどの伊藤先生のお話ですが、私もつい最近、中学生の話を聞いたのですけれども、今、中学校の部活動が、どんどん外部に委託というか、外部の力を取り入れようとしていて、卒業生が監督に来てくれたそうです。

○事務局 部活動の外部地域移行ですね。

○議長 その方向は大事だけれども、なかなか人材がいない。昼間の時間ということなので、それは可能な人がいると本当に助かりますし、教えるほうの人も、きっと自分の居場所になる可能性もありますよね。

○緒方委員 私が話を聞いた中学生は、今3年生ですけれども、1年生で中学校に入学したときは、監督の先生もすごく高圧的で嫌だったのだけれど、2年生になって監督が替わって、しかもその先輩の若者がコーチで入ってきてくれて「野球部がすごく民主的になった」と言っていました。

○議長 教員の存在というのは大きいわけですね。

○澤村委員 この萩原副議長の資料を見せていただいて、お話も伺って、すばらしい導入部だと感じました。協議テーマを与えられて、これまで議論をしてきましたが、何でこういうことが必要なのかというところからスタートしていなかったと思うのですよね。「区民の誰もが生涯にわたって学び続けることができる仕組みづくり、学びによる循環型社会の構築」という。どうすればこういうことができるかということはいろいろ考えてきましたが、なぜこういうことが必要なのかということに立ち返って、ここに書いてあるわけです。青少年育成者の高齢化とか、地域組織の加入率の低下とか子ども会、いろいろ今のことが書いてありますけれども、これは生涯学習とか社会教育だけの問題ではなくて、もう社会問題になっているわけで、様々なひずみが出てしまっているわけです。だけど、我々としては、この生涯学習という面から、多少でもこれの助け、改善になるような提言ができればいいということで、いろいろこれから展開されていくのだと思うのですけれども、そのきっかけを、きちんとここに書いていただいて、これが非常にすばらしいと思うのです。ですから逆に言えば、今後も、今の社会的な課題やひずみということを意識しながら書いていければいいのかなと思いました。

それともう1つ、「縦の循環と横の循環」ということが出てきますけれども、この「縦の循環」というところが、私が自分で考えていたのとちょっと違うところもあるのかなと。そこら辺をはっ

きりさせたほうがいいのかどうなのか。

ここでは、大人と子どもの分断のようなものがあるので、それをもう少しつつけていくべきだということで、「縦の循環」という意味合いをつくっています。世代間のコミュニケーション問題ですよね。私が最初に考えていたのは個人の問題で、自分が何か知りたいと思って勉強して、それを社会還元して、さらにまた気づきで知りたいと思う。そういう1人の個人の中の循環を考えていたのですけれども、どのように「縦の循環」ということを捉えていけばいいのか、と思いました。

「横の循環」については、おおむね同じような捉え方なのですから。

○議長 萩原副議長の資料の裏のページの「2) 横の循環の創出」の①のところ、学習者個人の学びの深まりと継続していく循環というのと、澤村さんが言った「縦の循環」というところと重なってきますか。

○澤村委員 そうですね。私の捉え方とちょっと違って。これでもいいのですけれども。

○議長 だから個人としては当然、年齢が上がっていくということも含めて、縦と見ることもできますね。個人の分と、あと世代を超えて、世代がつながって、子ども、若者、成人、お年寄りとかという中で、縦も、両方重なってくるところもあるのかも、ということはあるですね。

○澤村委員 結局、生涯学習の問題として、この循環というものを考えていかななくてはならないわけではないですか。そうすると、大人と子どもの分断を埋めようと思うと、それを生涯学習の面でどう捉えてアクセスしていけばいいのかということ、ちょっと分からないのです。1人の個人の中で、「縦の循環」を充実させていくには、いろいろ講座だとか、「区民大学」だとかということで、ある程度改善策は出てくるかもしれません。

それから、横の循環というのと、そのグループなり何なりを広げていくということで、対応は、可能かとは思いますが、大人と子どもの分断ということなのか。私の勘違いかもしれませんが、そういうものをどうやって社会教育、生涯学習として改善していくかというところは、考えないといけないのではないかなと思いました。

○議長 萩原副議長がお書きくださったところでは、例えば、かつしか郷土かるたにおける地域の大人が運営しつつ、また中学生がアナウンスしてくれる、とか、いろいろな意味の世代を超えた交流というのが展開可能性の意義というところにも書かれてはいるかと思うのですが、その辺、今の澤村委員のご意見に対していかがでしょうか。

○副議長 例えば、「生涯学習」と「ライフサイクル」はすごく近い言葉だと思うのです。よく「ライフサイクル」というと、個人の中の、生まれてから死ぬまでというような意味合いで使われることのほうが多いのですが、「ライフサイクル」というのは「世代継承」も本当は含まれているのですよね。子どもが大人になって、次の世代になっていく、次の社会の中心となって担っていくためには、先行する世代がいろいろなものを継承して、それが学校教育や家庭教育、社会教育を通じて、子どもや若者たちが様々な文化的なものを受け継いで、そしてまた自分たちなりにそれを咀

嚼して創造していくという「世代間のライフサイクル」という視点がもう1つあるはずなのですよね。現代は、その「世代間のライフサイクル」という視点が、どうも社会の中から希薄になってしまっている。多分、そのあらわれかもしれません。

私がこの(1)の「生涯学習・社会教育関連の課題」と書いてあるところにある、「青少年育成者の高齢化や担い手不足」というところですね。子ども会、青少年地区委員、青少年委員、これらはもう明らかに社会教育の活動なわけですけども、あまりこれが社会教育だとか生涯学習だという文脈で捉えられていないのかなと思ったのです。だからそういう意味でも、これは、私たちが生まれてから死ぬまで、成長、発達、人間形成をトータルに考えたときには、そうした「縦のライフサイクル」と「横のライフサイクル」という形で捉えてみてはどうか、と思ったところです。

○澤村委員 確かにそういう考えもありますね。今、野球部の監督を引き受ける人が出たという話がでましたが、それはまさに、ここで言う「縦の循環」でもあるわけですよね。それから、ジュニアリーダーだとか青少年育成者とか、そういう人を養成していくような対応、方法というもの、そうすると縦の循環社会を創出していくためには必要だという視点を持つ必要があるのかもしれない。

○議長 今、「世代継承」という、世代間であるものを継承していくということのお話を聞いたときにパッと思い浮かんだのは、これもお隣の足立区で社会教育主事の仕事をやっていたときに、青少年委員会を担当し、研修をやった時のことです。長野県の諏訪大社の御柱は、本当に世代継承なのです。先輩たちの言うことを聞かないと、やれないのです。だから町で会っても先輩たちの言うことを聞いたり、本当にしっかりやらないと乗れない。死人が出てしまう場合もあるぐらいの、そういうことです。ということで、どうそれを継承しているのか、ぜひ知りたいと思って、青少年委員さんとバスで、40数人で芽野市まで行ったことがあります。どんなふうに伝えていくのか、若い人はどうそれを受け止めているのかというようなことで、伝統的な行事をきちんと町全体で継承していくということがちゃんと出来上がっているのです。別に文章になっているわけではなくて、ずっと先輩世代からつながってきているという。それで、若い人たちが地域の中心メンバーになっていくのだということが、その中で育まれている。こういう力が大きいから、あんなすごいことを毎年ちゃんとできるのだ、ということをおもったりしました。

そういう意味で、世代継承がなかなかできにくくなってきている中で、その中で祭りとか、そういう残っているところの世代をつなげていくことの意味みたいなものを改めて今のお話から思い浮かべました。岸和田のだんじりの上に乗って飛んだりするのも、そうした営みだと思います。

○副議長 ちなみに、もう20年前から、小学校高学年、中学生、だんだんと思春期になればなるほど、「大人になりたくない」と答える率が高くなっているのです。つまり大人の背中も見えていないし、むしろどっちかという塾帰りに電車で疲れたサラリーマンしか見えていないというような、そういう日常になってしまっていたりとかして、実は直接大人たちと関わって、働きがいであると

か生きがいであるとか、背中を見て育つという機会が都市部の中でどんどん減ってしまっているということも、恐らくそういう要因の1つだろうと思うのです。

大人が楽しんでいる姿を見せたり、一緒に楽しい場をつくるとか、そういったことが、次世代を育てていくことでは大事なところなのだろうと思って、そこも含めて書ければと思います。

○議長 ありがとうございます。NPOが子ども向けの事業をやっているところでは、その関わっている大人の人たちが元気にワクワクしないと子どもたちも楽しくない、ということですね。神奈川大学の学生の自分の体験を先日の授業で話してくれましたが、大人がどれだけワクワク楽しめるかというのは、すごく大事だと思いました。

今、いろいろご意見を出していただき、また意見交換の中で見えてきたこともたくさんあったと思います。そのことも踏まえながら、萩原先生には少しずつ文章化のほうを進めていただいて、また文章化できたところで一緒に確認をしていければと思います。

どうですか。皆さんのほうから、事務局の方も含めて何か今、お聞きしたいところがあれば出していただいてもよろしいかと思いますが、どうでしょうか。

○事務局 副議長やほかの委員の皆さんが今までおっしゃっていたことで、「居場所」や「空間」とか「場の大事さ」ということがありました。振り返って、葛飾区の生涯学習・社会教育の課題としては、本当の意味での「居場所」や「拠点」がない、ということがあります。若者にとっても大人にとっても居心地がよくて、何かあったら職員がいて相談ができたり、いろいろな人が集まって、わいわい楽しいことをやっているような、居心地のよい居場所で、そこで学習に発展したり、人とのつながりが深まるような、「拠点となるような居場所」がありません。それは大きな課題かと思います。

過去には社会教育館という施設が4館あって、私ども社会教育の専門職員がいて、住民とともに多くの事業を開催していました。それを7館、11館と増やそうという構想があった時代もあったのですけれども、今、それは地域コミュニティ施設という、建物は残っているのですけれども、区の職員がいないところになっています。そこは、「場」の問題の課題かと思います。

○議長 ありがとうございます。「場の大切さ」については第2章でもかなり触れていますので、また考えていければと思います。

では、いろいろな今出てきたご意見を踏まえていただいて、文章化のほうをまた先生に進めていただければと思います。

これから残りの時間は第2章のほうで、私のほうで書かせていただいたところを進めていければと思います。今日見ていただいてすぐに意見を、というのは大変なのかも分かりませんが、読みながらいければと思います。

第2章の中身としては、荒川区、杉並区の取組から学ぶことで、ここでは、本当は葛飾区のことでも書いていければ、より比較になったところはあるかと思うのですが、まずは「循環型」について

私たちが考えていく上で、2つの区から事例報告と、現場に行ってみてきて学んだことを整理しておくという意味で書いております。

まず、私が最初の七、八行を読みますので、その後、緒方さんは1のところを読んでいただければと思います。

1番目の2のところ、荒川区/杉並区を取組から学んだこと。今期の本会議が取り組む課題である“学びによる循環型社会”の構築を目指すに当たり、「循環」の視点から先進的な取組を展開している荒川区と杉並区の実例を参考していくことになった。

荒川区については「荒川コミュニティカレッジ」（以下、コミカレと表記）の、杉並区については「すぎなみ大人塾」（以下、大人塾と表記）の取組を学ぶこととし、それぞれ担当者と事業に参加しその後も活動している区民をお招きし、報告を受けた。なお、荒川区については、コミカレ修了生も参加する「生涯学習フェスティバル」も見学した。

以下、両区を取組から学んだこと、特に共通して見ることができるポイントを確認していきたいと思っております。

では、1のところ、では緒方委員、読んでみてください。

#### ○緒方委員 1 基本的な理念と位置づけの明確化

行政の行為は、よって立つ法律や条例に基づき、さらには自治体の方向性を明示した基本構想の実現をめざす総合計画に基づき展開されるものであり、社会教育事業も同様である。様々な個別事業においても、区政全体における位置づけを明確にすることは不可欠であり、また、位置づけの明確化は区民への説明責任の視点からも欠かせないものである。

##### （1）荒川区の場合

荒川区では、将来像を「幸福実感都市あらかわ」と定めた基本構想に基づき、その実現を目指し区政が展開されている。平成30年策定の「荒川区生涯学習推進計画（第三次）」においては、基本理念を「学びによる障害活躍のまちあらかわの実現」とし、その実現に向けて「学ぶ・つなぐ・活かす・ひろげる」の4つの視点を挙げ「施策の柱3 地域で学び活躍する人材を支援する」の主な取組に、コミカレを位置づけている。

##### （2）杉並区の場合

杉並区に限らず「基本構想」は10年から20年をスパンとして改正される。現行の令和4年策定の「基本構想」は、区政が目指す街の姿を「みどり豊かな 住まいのみやこ」としている。また、令和3年策定に策定された「杉並区教育ビジョン2022」は、「みんなのしあわせを創る杉並の教育」を目指しており、大人塾もこれらのビジョンに基づき、区民の自治意識の向上を図るために、自由で新しい発想を育む学習の場として位置づけられている。

○議長 ありがとうございます。両区とも位置づけがはっきりしているということを確認しておいたところです。では、2番のところを澤村委員、お願いします。

## ○澤村委員 2 拠点となる施設の存在

社会教育施設は、人々が出会い、交流し、学び合うことができ、健康づくりやスポーツ、文化・芸術など、様々な活動を行うことができる場であり、さらに学習相談や情報収集・発信などの幅広い役割を担っている。単なる場所を貸し出す施設とは異なり、社会教育に関わる専門性を持つ職員が存在することで、学び合いの可能性を広げていくことができる施設だと言える。

### (1) 荒川区の場合

2022年度までのコミカレは、区役所からもほど近いサンパール荒川に、専用スペースを持ったコミカレ事務局を会場に実施されていた。令和5年からは、廃校となった小学校を活用した生涯学習センターに拠点を移し、センターの主催事業に位置づけられたことより、活動スペースは大きく拡大された。これらの施設には、社会教育主事や社会教育指導員が常駐し、コミカレ受講生や修了生から質問や要望などに対応している。何よりも、そこに行けばいつでも気軽に話をできる職員が「いる」という環境が整っている。

○議長 その後の部分は、私が先ほど書き換えたので、書き換えたものを読んでもみます。

### (2) 杉並区の場合

大人塾は、教育委員会事務局生涯学習推進課が所管する社会教育センターの主催事業として実施されている。荒川区同様、社会教育主事が常駐しており、大人塾の企画運営や修了生の活動支援にあたっている。大人塾以外にも様々な区民向けの講座等を実施しており、荒川区の生涯学習センターと共通しているところが多い。なお、セッション杉並（ここは社会教育センターと高円寺地域区民センターが複合された施設を「セッション杉並」と言っているのですけれども）杉並自体の施設管理については、指定管理者制度が導入されており、事業者による各種の自主事業が実施されている。

ということで、両区とも区直営のセンターがあつて、そこに職員もいて、いろいろな支援もしている。学ぶ場だけではなくて、そのセンターに対しての情報発信とか学習相談とか、そういった場が2つのところになりますよ、ということをごここでは書いています。

では、「3循環を実現する学習プログラムの特徴」はどうですか。

○事務局 私が読みましょうか。

○議長 いいですか。では、荒川区の場合のところを読んでみてください。

## ○事務局 3 循環を実現する学習プログラムの特徴

学習プログラムは、その事業の目的を反映したものでなければならないことはいままでもない。その目的は、先に触れた「基本構想」等に描かれた将来像の方向性に合致するものとして設定される。このことは、両区の学習プログラム構成からも見てとることができる。

### (1) 荒川区の場合

「1 基本的な理念と位置づけの明確化」で触れたように、コミカレの位置づけは明確化され、「学ぶ」、「つなぐ」、「活かす」、「ひろげる」という視点が全てにおいて貫かれていることを、確認

したい。具体的には、「地域で活躍する人材への支援」の前提ともいえる、地域で活躍する人材自体の拡充を可能とするプログラムが設定されている。企画の主体は複数の職員が担っており、「あらかわまちづくりコース」や「あらかわ地域交流コース」、「あらかわ健康・福祉コース」など、分かりやすい目的が明示されたコースが設けられ、2022年度や2023年度においては、20回という長期のプログラムとなっている。

プログラムの特徴として、多様な学習方法を取り入れていることが挙げられる。研修室での学びと現場に出向いての学びが行われ、また研修室においても講義や報告に加え、グループワークやワークショップも活発に展開されている。

さらには、修了生によるサークル・団体を中心に実施されている「学園祭」や、生涯学習センターのフェスティバルでブースを担当すること自体がプログラム化されている。そのために企画力を高める学習と具体的な企画の検討が講座の中で行われている。こうしたイベントへの参加は、先輩たちとの交流機会ともなっている。

講座の終盤には、学習成果発表会や学習会企画の発表会が設定されており、それまでの学びを振り返りながら発表内容を詰めていく。発表会には先輩たちも参加し、時には厳しい意見も出るなど、貴重な学び合いの機会ともなっている。

このような具体的な事業の実施に向けて企画を行い、実際に実行するというところまでプログラムに組み込んでいることで、コミカレ終了後の区民としての自主的な活動につながる可能性を高めている。

もう1点、コミカレのプログラムの特徴として、柔軟性の高さが挙げられる。参加者の状況に応じて組み換えが行われることになるが、そのためには担当職員の参加者の動きについての深い洞察力が不可欠であり、さらにはプログラムの変更に伴い、講師との打ち合わせが再度行われることもある。

○議長 佐藤さん、ありがとうございます。では、与儀さんお願いします。

○事務局 (2) 杉並区の場合

すぎなみ大人塾は「自分を振り返り、社会とのつながりを見つける“大人の放課後”」をキャッチフレーズとしており、杉並区社会教育センター主催事業として実施されてきている。令和5年度は、総合コース「チガイ・ラボ」(全9回)、地域コース「みんなで遊楽(ユウガク)体験～まち発見クイズ・プロジェクト～」(全8回)、はじめの一步コース「ワクワクからはじまる大人の放課後デビュー」(全5回)の3コースが開催された。

どのコースも比重に違いはあるものの、座学と体験的な学習が展開されており、特徴としては、企画段階や運営の場面での支援者の存在が挙げられる。各コースには学習支援者が置かれ、企画に参画するとともに、講座開始後は受講生同士の話し合いを活発にする進行役などを担うなど、担当職員と連携を取り、受講生の関心や意欲などに合わせた運営を行っている。このことにより、荒川

区のコミカレ同様、変更可能性が高いプログラムを実現することができている。

さらに学習支援者に加え、総合コースでは学習テーマに応じた専門家が講師を務め、地域コースでは、学習支援者のほかに学習支援補助者を置き、受講者と地域の活動をつないでいる。こうしたつなぐ活動の成果は、卒塾後の活動にも表れてきている。この補助者は卒塾生や既に地域活動を行っている区民で、呼称はコースにより「学びあいの伴走人」「荻窪サポーターズ」という名称を使用する場合もあり、このことから自由さが感じられる。

プログラムの最後には、コースを超えての合同での「すぎなみ大人塾合同成果発表会」が設定されている。発表会に至るプロセスにおいて「何を伝えたいか」を検討し合う時間自体が、これまでの学び合いを協働でふり返る貴重な時間となっているとのこと。やりっ放しにはしない、ということがプログラム構成から読み取ることができる。発表会には、それまでの卒塾生も参加し、学びの成果や活動情報を交換する機会となっている。このような発表会の開催は、荒川区とも共通するものであり、本会議が目指す「循環」の実現にとって、欠かすことのできないものであることと言えるだろう。

○議長 ありがとうございます。矢作さんにもお願いしていいですか。

#### ○事務局 4 終了後の自主的活動

本会議においていただいた両区の区民の方からも報告いただいたように、コミカレ、大人塾とも、講座での学び合いを活かして多様な活動が生まれてきている。荒川の区民の方からは、想いを同じくするメンバーに出会うまでコミカレに参加し続けたことが語られ、また、修了生が立ち上げた活動団体は40を超え、コミカレ同窓会も組織されているとのこと。杉並の区民の方からは、卒塾生はそれぞれの持ち味を活かして地域で活動するとともに、卒塾した人は誰でも入れますよというような緩い集まりの大人塾連の活動について報告いただいた。

両区とも、学び合いの成果を基にし、自主的な活動が展開されており、また、つながり合う組織も動いているという共通点がある。より詳細に見れば、そうした自主活動の展開には、必要に応じて求められる支援を担う職員の存在も共通している。

○議長 ありがとうございます。では、5番を、また緒方委員、お願いします。

#### ○緒方委員 5 コミカレ、大人塾から学ぶこと

今まで述べてきたように、両区の間組から学ぶことは多い。ここでは箇条書きではあるが、参考になることを記していきたい。

##### <荒川区>

- ・PR活動の一環として、30、40、50、60歳になった区民に、無作為で1,000件ずつ合計4,000人に、QRコードつきのコミカレ紹介のはがきを発送している。

- ・コロナ禍において、コミカレの修了生が活動している地域活動団体の活動の様子を職員が撮影し、12団体の活動を動画で発信する取組を実施した。さらには毎年度、コミカレの参加者募集の

時期には、荒川区制作広報番組（ケーブルテレビ）に担当職員が登場し説明するなど、動画を活用した発信に取り組んでいる。

○議長 ありがとうございます。では最後、澤村委員、お願いします。

○澤村委員 <杉並区>

・令和4年度からは若い世代を対象としたコースが設定され、5年度の「すぎなみU30 ミーティング」では、30歳以下の15人が参加し、運動会を企画し実施するというプロジェクトが展開された。その結果、100人を超える参加を得て「すぎなみみんなの大運動会」が実施された。

・大人塾の運営やコース設定については、年2回程度「アドバイザー会議」が開かれ、担当職員、学習支援者、そしてアドバイザーとして社会教育委員と社会福祉協議会職員が参加し、社会教育計画や地域福祉の視点で感じることなどを共有し、大人塾の事業展開や成果を多面的に検討している。

○議長 ありがとうございます。両区の報告を受けて、見学も含めて、大事だと思うことを書いてみたというところです。今すぐにご質問とかご意見というのは申し訳ないかと思えます。読みにくかったところ、字が抜けていたりとか、余計なのが重なっていたりは、また直させていただきたいと思えます。

先ほど与儀さんからもありましたが、施設のことなど、大事だということを、2つの活動がいろいろな自主的な活動につながったりすることも含めて、拠点施設のあることの大事さも、学んだこととして入れているところです。

ということで、いろいろな不足部分もあるかと思いますが、まずここに書かれたことについてのご質問とか、分かりにくい点とかがあれば、ご意見を頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

○事務局 易しい言葉で、大変分かりやすいと思えました。

○議長 難しい言葉は使えないので。2つの区の取り組みを学びましたが、かなり共通しているところがあるということ、これを書いてみて、改めて思いました。

○事務局 細かいことで、申し訳ありません。講座に参加して学んでいる人のことを何と呼ぶかなのですが、杉並区の方と荒川区の方が言っている言葉をそのまま書いたほうがよいのか、あるいは、この提言書で共通に言う言葉を使うのか、どちらがよいでしょうか。

○議長 書いていただいた原稿では、両区とも「受講生」というのが多かったのです。ただ、葛飾は何を使っていますか。「参加者」とか。

○事務局 葛飾は「参加者」が多いです。

○事務局 講座によって使い分けているわけではないですけども、混在しています。

○事務局 あまり「受講生」とは言いません。以前はそう言っていたようですが。

○議長 これは、『生涯学習支援のデザイン』に掲載された荒川区の原稿では、「受講生」と書いてあり、『社会教育経営のフロンティア』に掲載された杉並区の原稿には「受講生」と書いてあり

ました。関西のグループみこしというグループの人たちは「講座生」という言葉を使っていたりとか、いろいろ違うのですよね。だから、私たちは講座に参加している人のことを、何とかと決めてもいいのかも分からないですね。読みにくいと感じさせるよりはいいのかな。

○事務局 読んだ中では、混在していても別に違和感はないかなという気はしました。

○事務局 そこは整理をしてもいいかもしれません。

○議長 そうですね。澤村さんとかは、どう使っていますか。

○澤村委員 私はその時によって、「受講生」と言ったり、「参加者」と言ったり、「出席者」と言ったりです。別に統一する必要性もそれほどない気はします。厳密に定義して使い分けるということでもないですよ。

○議長 でも、定義して使っている、使い分けている人もいます。

○澤村委員 いるのですか。

○議長 はい。

○澤村委員 そういうことであれば、それは使い分けが必要かもしれません。

○議長 グループみこしの方から、「受講」だと受身的なので、「講座生」と表現していると言われたことがあって、すごく印象に残っています。

では、少し考えてみましょう。読みやすさというところで。また、私たちの位置づけとしてはこういう言葉を使っている、ということを書いてもいいかなと思いました。ありがとうございます。

○事務局 2つの区を見て共通しているのは、学びっ放しにしないという明確なビジョンがあり、それを活動にちゃんと結びつけていたり、まちづくりにつなげていたりというような明確なビジョンがちゃんとあって、それに基づいて事業をされているというのが1つと。あとは区役所の中の様々なセクション、区役所だけではなくて、例えば社会福祉協議会が出てきたりとかというものもありますけれども、生涯学習単体ではなく、いろいろなところと関わりながら事業が展開されているという意味でいうと、それが区政の施策の1つであるという位置づけにあるということと同じで、ほかのセクションからの認知度が高まることにつながっているのかなという感じがします。

○澤村委員 荒川区に行ったときのことを思い出しました。OBの方かな。そういうコミカレの説明を、本当に楽しそうにしてくれるのです。私、初めて会って全然知らない人なのに、「これはこうなのですよ」と自分でつくった手作りのパネルを使いながら、それも楽しそうに。荒川区のことを誇りに思って、説明してくれるので、私もいろいろ質問をしたりしてしまいましたけれども、ああいうことが自然とできるということはすばらしいなと思いました。

○議長 それは、そうできるようなプログラムを作っているのだと思うのです。実際に生涯学習フェスティバルに参加して何かをやるのだ、ということ自体がプログラムに入っていて。何を発表するのかということ、課題ごとにグループをつくって話し合う講座を私が担当したこともあります。新しいグループが生まれたとして、そこでどんな企画を立てていくのかということを考える

ために、企画の立て方を担当したこともあります。グループワークで実際に企画を検討し、実施するというように。学園祭や最後に成果発表会というのであって、自分たちは何をやっていきたいのかというところを整理して発表する場面があったり。というので、終わってから何をやるか考えましょうというよりは、もっと早い時期から終わった後のことを考えたり、企画の力を高めるということが、プログラムに入っているというのが大きな意味なのかな、と受け止めています。

○澤村委員 定年前から60代ぐらいの人たちが仕事を辞めてしまって、やることがないと家にいて、昼間から酒を飲んでいるとか。そういうことになるのは非常にもったいない話で。そういう人たちをうまく取り込んで、そういう人たちが核になって縦の循環、横の循環というのが広がっていけばいいな、と思うのです。区民大学の運営委員をやっているときから、どうやって人を集めるのかというところが一番悩むところなのですよ。そういう企画をしても、どうやってそこから先、人を集めるのだと。

○議長 企画運営委員には十数人の方がいらっしゃる。皆さん、思いがあって来ているわけなので。

○澤村委員 チラシをつくってホームページに載せる程度のことが普通ですよ。

○議長 次の段階に、どうつなげていくかですよ。

○澤村委員 その思いをどうやってつなげるか。区民大学が先ほどの、コミュニケーションが希薄になっている社会問題にまで踏み込む意味合いもあるとすれば、家に閉じ籠もってやることがない、時間を持て余しているような人たちにもぜひ参加していただいて、コアになっていただけるPR方法を考えることも必要だと思いますね。

○議長 特に、そういった男性のケースが多い可能性もあるので。その男性の多くは、いろいろなキャリアがあって、会社でバリバリやっていた人もいらっしゃるのですよ。活躍する場面があれば、コミカレの早瀬さんのように、きっといろいろなことをやっていく可能性があるのだと思うのです。そういった仲間と出会って考えて、実際に企画を実施してしまうところまでいくと、やると面白いということを体験できると、次に行く可能性があるかも分からないですね。

○澤村委員 私自身のことを考えても、今年70になったのですけれども、55歳を過ぎてからのこの15年間ぐらいの時期というのは、ある意味非常に楽しかったです。時間を持て余すということはあまりなかったような気がします。

○議長 お忙しいわけですね。

○澤村委員 ええ。区民大学にも入れてもらって、探検団やらもやって、改めて、自分が育ってきた地域へどうやって還元するのか、ということを考え出すのは、この時期なのかもしれないですね。

○緒方委員 小見出しの立て方ですけども、1番目が「基本的な理念と位置づけの明確化」というのはすごく分かりやすいと思うのです。2番目も、拠点となる施設が存在するのだというのが

はっきり分かると思うのです。3番目が「循環を実現する学習プログラムの特徴」というのがちょっと抽象的かなと思ひまして。ずばりと、学習プログラムを、参加者が参画しながらつくっていつていると。途中で変更もあり得る、柔軟な学習プログラムであるというのを、それが循環を実現する秘訣だというのを書いてしまったほうがいいのではないかなと思ひます。

あと、終了後の自主的活動があるというのも特徴的な、特徴を捉えた小見出しだと思うのですけれども、5番の「コミカレ、大人塾から学ぶこと」というのが、大見出しと同じようになってしまふので。

○議長 考えたら、そうですね。

○緒方委員 ここでは多分、世代間継承みたいなことでしょうか。

○議長 2つ、入っていますね。

○緒方委員 若い世代に循環していくコツや、広く区民に周知していく、横に循環というか横展開のコツということが学ぶべきこと、という2つが書かれているのではないかなと思ひまして、そういう小見出しにしたほうがいいのではないかなと思ひました。

○議長 ありがとうございます。

○澤村委員 「循環」という意味が、さっき萩原副議長が書いてくださったことと、荒川区、杉並区が言っていることとは、同じなのですか。

○議長 この3の「循環」を実現するというのは、活動を企画して、実際に活動までやってしまうという意味の「循環」になっているので。

○緒方委員 「参画」では駄目ですか。

○議長 「参画」というよりは。

○緒方委員 「企画」。

○澤村委員 難しくなってきましたね。

○議長 ここでの意味は、実際に行動につながるプログラムということなのです。自主活動につながるプログラムという。

○澤村委員 循環して戻ってくるころまでは含んでいない。何か社会に貢献するようなことですね。

○議長 講座の中で、その実際の活動までやってしまう。

○澤村委員 学びっ放しではなくて、ということですね。

○議長 講座で実際の活動を実施することで、講座終了後の自主的活動につながるということ。そういう意味の「循環」ということだったのです。

○澤村委員 では、ちょっと違いますね。

○議長 ここは、ちょっと考えてみます。萩原副議長は、いかがですか。

○副議長 今までの議論や事例についての意見交換のエッセンスを全て文章に組み込んで、分か

りやすくまとめていただいていたありがとうございました。そんな気持ちが一番大きいです。

私も緒方委員がおっしゃったような、ポイント、ポイントの小見出しをつけると、ざっと見て骨子が分かるという感じはしました。でもそれは、これから肉づけをいろいろして、最後に小見出しを考えればいいのかなどは思います。

あとは、杉並区の大人塾のところですけども、ここに私が第1章で書いた、「縦の循環」のところに関わるところが書かれているのですが、2章以降はどうしても区民大学ベースで話が構成されていくので、第1章で言った「縦の循環」が、この報告書全体の中ではどうしても薄くなってしまふのかな、と。これまでの会議の議論からすると、やむを得ないかなと思ったりもするのですが、ここをどうしましょうか、というところですね。

ただ、5ページの今、指摘したところの杉並区の場合は、若者を意識した取組もしているというところは注目してもいいかなと思います。

あと、荒川区が区民台帳を使って定期的に30代からダイレクトメールを送っているという記述が。

○議長 はがきを送っています。5ページのところです。

○副議長 そうですね。ここは1つ確認ですけども、これは30代からでしたっけ。20代は含まれていない。

○議長 見たものでは30歳からになっていたのです。

○副議長 30歳からなのですね。荒川区のコミカレの募集の年齢が、多分18歳以上でした。なので、そのあたりはどうしているのかなと、ちょっと気になりました。

○議長 分かりました。後ほど確認したいと思います。

○副議長 10代、20代も、荒川区のコミカレではターゲットにしている、たしか頂いたパンフレットの中の参加者の年齢層割合みたいなのところだと、結構各年齢層が満遍なく参加していたという記憶があるのです。そういう意味では、実は荒川区も杉並区も、若者層もしっかりとフォローしている。そのあたりも少し、もしかしたら見出しとして出すことで、第1章の縦のつながり、世代継承ではないですけども、その辺のところに接続するかなとは思いました。

○議長 そういう意味で、例えば5のところ、「縦の循環」とか若い世代へのアプローチという形で、荒川区が20代にも送っているかも含めて、正式なものになる前に、両方の区には確認してもらおうと思うのです。事前に20代かどうかは調べておこうと思いますが。

荒川、杉並の20代、30代、無作為の1,000件の郵送というのと、杉並の「U30」のところなど、若い世代へのアプローチというのは、5の最後の大事なところをポイントとして書いて、縦の循環、若い世代へのアプローチといった項目を立てて書くと分かりやすくなるかなと思いました。それはまた再構成してみます。

○副議長 あともう1つ、「縦の循環」で、そうかと思ったのが、この中で先輩受講者と現役の受

講者とのつながりができていますよね。

○議長 とてもあると思います。

○副議長 両区とも「同窓会」という形でつながりがあって、それもある意味「縦の循環」と捉えていいのであれば、第1章の縦の循環の意味合いの中に、それも入れてもいいのかなと思ったのですが、いかがでしょうか。

○議長 ありがとうございます。これも「縦の循環」として、大事なものとして捉えることができるのではないかと、といった表現を、OBとの関係のところに入れておこうと思います。

○副議長 私も第1章に、そこは加筆したほうがよければ、加筆したいと思いますが。

○議長 ありがとうございます。そういう意味で、「縦の循環」、「横の循環」という言葉を使っているので、それが2つの区ではどんなふうにも実際表れているのかと書くと、1章と2章のつながりがよく分かってくるなと思います。

こういう感じで、次回にはこれの修正版と、第3章について書く予定になっています。

○事務局 お忙しい中を、申し訳ありません。

○議長 いえ。整理する上では、様々なことに気がつくのだと思いました。

それぞれ1章は萩原副議長、2章、それ以降は私ということで詰めていって、次回に、できれば数日前には送るようにして、見ていただけるように頑張りたいと思います。萩原副議長、またよろしくをお願いします。

○副議長 よろしくをお願いします。

○事務局 どうぞよろしくお願いいいたします。

○議長 言葉にしていくと、また改めて気がつくことがあると思いますので、また次回以降もご指摘いただいて、また直していきたいと思います。

では、中身の部分についての議論のほうは、今日は以上で終わりたいと思います。

## (2) 今後の会議の進行について

○議長 では、今後の会議の進行、日程のことも含めて、事務局のほうからお願いします。

○事務局 資料5を御覧ください。前回とほぼ同じものです。今回は第15回というところで、11月14日に、本日と同じく、こちらの706会議室で行いますので、よろしくお願いします。

○議長 それだけでよろしいですか。

○事務局 その後は、12月17日までには内容を固めていき、最後に2月4日の教育委員との懇談があります。その進め方については、正副議長と相談をさせていただき、下案をつくって皆さんにご提示するというところでよろしいでしょうか。12月17日のときには、皆さんに共通理解していただいて、進めていきたいと思っております。

○議長 提言書を出すということがあるので、提言書の概略を説明させていただいて、主に、それを巡って話し合いというイメージかなとは思ってはいたのです。

○事務局 そうですね。そのためには提言書の基となるものを、事前に教育委員に配付しなければなりません。

○議長 そうすると、11月14日と12月17日までに検討をして、1月の中旬ぐらいまでに。正式な形にしていって、皆さんのチェックも入れて、一応の完成版をつくって、2月4日の1週間か10日前にはお届けするか、もしくは概要版みたいなものをつくって、それで説明をすとかということでも。

○事務局 概要版をつくるのも、二重のものになってしまいますので。2月4日には、完璧な完成版ではなくても、完成一歩手前のものをご提示できればと思います。

○議長 その後に若干、修正は入る可能性もあるということで、それを一応と綴じたものをお渡しした上で、概略を説明するというような。

○事務局 それが良いかと思います。

○議長 分かりました。

中身の検討としては、あと2回でやっていった上で、あとは紙やデータを見て、修正をさせていただくようなイメージですね。

あと、教育委員さんと私どもが会うということはこの日だけなので、せっかくの機会ですね。これは時間的に1時間ぐらいなのでしたっけ。

○事務局 そうですね。1時間強ぐらいです。

○議長 懇談会后に、我々の振り返りもするのですよね。

○事務局 はい。教育委員さんとの懇談会は1時間ちょっとくらいで、その後、また社会教育委員の皆さんだけで残っていただき、第14期のまとめをしていただければと思います。

○議長 確認や振り返りですね。それが2月4日ということで、分かりました。では、そういうことで、本当にあと、お会いするのが3回しかない、審議をするのが2回しかない、ということになっています。何とか時間を有効に使いながら、また進めていきたいと思っています。

### (3) その他

○議長 最後に、委員の皆さんから何かありますか。今日のことでいいですし、ほかのことも含めて。

○緒方委員 ご案内をしたいのですが、かつしか子ども・若者応援ネットワークで毎年区民大学講座を1回やるのですけれども、今年度は、なんと3月16日の日曜日にやります。午後2時から4時半まで、亀有地区センターのホールで。「不登校30万人時代のリアル」ということで、現役中

学生と、去年まで中学校校長先生だった教育委員の先生と。

○事務局 「縦の循環」ですね。

○緒方委員 そうですね。

○議長 それは区民大学の一環としてやるものですか。

○緒方委員 区民大学です。子ども・若者応援ネットワークが企画して。

○事務局 区民大学の団体連携講座です。

○議長 分かりました。では、またチラシとかができれば見せていただきたいと思います。

○議長 では、課長さん、最後をお願いします。

○生涯学習課長 私もあと何年かすると完全に仕事から引退してしまうので、「高齢者の孤立か、自分に差し迫っているな」と思いつつも、では自分で何かできることがあるのかなと考えると、何だったのだろうというところは、振り返ると寂しいなというところも感じた今日の議題でございました。実際に同じような立場の人が同じような危機感というか、これからの展望を考えるきっかけになってもらえると、というところも切り口とするとあってもいいかなとは思っています。

あと区民大学の理事会というところが年に2回ありまして、区長も参加している中で、「若者をどう取り込むか」ということと、「学びっ放しでいいのか」というところが検討課題として出されているということがあって、今日の中でもそんなお話が出てきたので、こういった学びの機会の共通の課題なのだと、改めて認識した次第です。ぜひ、そういったところも含めて報告書に赤裸々に載せていただくというところが、私たちに対する警鐘でもあるのかなと思いますので、どうぞよろしくをお願いします。今日はありがとうございました。

○議長 ありがとうございました。

本日の会議は、これで終了します。

—閉会—